

ラルフ・M・イーズリーとシカゴ市民連盟

伊 藤 健 市

目 次

- 1 はじめに
- 2 イーズリーの略歴
- 3 市民運動の展開とシカゴ市民連盟
- 4 イーズリーとシカゴ市民連盟
- 5 今後の課題

1 はじめに

19世紀末までのアメリカは、地方を中核とした農業国であった。そうした地方経済を支えていたのは、例えばトマス・ジェファークソン（Thomas Jefferson）政権下では自作農民と小規模工場主であったし、あるいはアンドリュー・ジャクソン（Andrew Jackson）政権下ではフロンティア個人主義者であった。だが、彼らは、19世紀末までにアメリカの諸都市に殺到する膨大な数の労働者階級によって片隅に追いやられた。それは、それまでの地方的な性格が強かったアメリカ経済が、全国経済を中核とした性格のものへと転換したことを意味した。それを推進したのは、いうまでもなく巨大ビジネス企業であった。

巨大ビジネス企業が中心となって生み出したこの地方経済から全国経済への転換は、少数者の手に巨大な富を集中させ、中産階級の規模拡大をもたらす一方で、移民を含む多くのアメリカ人にとっては、窮乏の元凶としか受け止められなかった。さらに、事態の悪化を招いたのは、当時の政府がこの経済転換が引き起こした状況を規制し、救済する諸施策を提供する意志も方法も持ち合わせていなかったことにある。それは連邦レベルだけに留まらず、州レベルでも同じことがいえた。

こうしたなか、労働者、農民、失業者や貧困層の擁護者、未亡人、退役軍人、中産階級に属する女性たち、特定業種の製造業者、自然環境保護論者といった人々、さらには巨大ビジネス企業自身も、それぞれの利害に沿って種々の団体を組織し始めた。

シカゴ市民連盟（Chicago Civic Federation or Civic Federation of Chicago, 以下CCF）とその後継組織である全国市民連盟（National Civic Federation, 以下NCF）は、こうしたアメリカの状況下で誕生した。両団体は、建国以来初めて連邦レベルで規制を求められたにもかか

ならず、そうした役割を引き受けるだけの資源も専門知識もなかった政府を支援し、ある意味その代役を演じるといった目的をもって登場した。事実、NCFは州議会と連邦議会で検討された多くのモデル法案を作成し、公共政策に対し数多くの勧告を行っていた。

ラルフ・モンゴメリー・イーズリー(Ralph Montgomery Easley)は、両団体の会長職に就くことはなかったが、ある意味この両団体を主導したと評価できる人物である。この小論の目的は、イーズリーがCCFに何を求め、そこで何を得たのか、そして何が得られなかったのかを明らかにすることにある。その結論は、彼がCCFに代えてNCFを組織しなければならなかった点に集約される。つまり、CCFでは彼が意図した結果が得られなかったのである。ただし、それはCCFの目的とイーズリーの意図が合わなかっただけで、CCFの活動自体が失敗であったことを意味するものではない。この点で、彼がCCFを通して得た最大の成果は、NCF結成へとつながる人脈であった。

2 イーズリーの略歴

まず最初に、イーズリーの略歴をみておきたい。彼は、1856年2月25日、イリノイ州フレデリック(Frederick)で生まれ(1939年に逝去)、当地の公立学校で教育を受け、キーノイ大学(Quinoy Colledge)を卒業した。1875年、教師としての職に就くためカンザス州ハッチンソン(Hutchinson)に引っ越した。ただし、教師として働いたのは1877~78年で、その後1882~87年には郵便局長と同時にパートタイムの新聞記者としても働いていた。1883年、『ハッチンソン・ニュース(Hutchinson News)』を買収し、その編集に携わることになる。編集長としての在職期間は、イリノイ州に戻る1891年まで続いた¹⁾。

シカゴに戻った彼は、中西部の大新聞の1つである『インター・オーシャン(Inter-Ocean)』紙の政治記者、コラムニストを経て「政治・経済部」の責任者となった²⁾。同紙は、1871年のシカゴ大火災の折に創刊された共和党系の新聞で、シカゴのセツルメント・ハウスを「無政府主義者の巢窟」と評するなど、体制擁護的な論調で有名であった³⁾。しかしイーズリーは、同紙で学校改革(school reform)やコーデイジ・アンド・コール・トラスト社(Cordage and

1) *Marquis Who's Who in America*, Vol.1, Marquis, 1966, p.354; Christopher J. Cyphers, *The National Civic Federation and the Making of a New Liberalism, 1900-1915*, Praeger Publishers, 2002, p.20; Gordon M. Jensen, *The National Civic Federation: American Business in an Age of Social Change and Social Reform, 1900-1910*, Ph. D. dissertation, Princeton University, May, 1956, p.24. なお、イーズリーの生誕地に関しては、ペンシルヴェニア州ブラウニング(Browning)とする説もあるが(S. B. Kaufman and P. J. Albert, *The Samuel Gompers Papers*, Vol.3, University of Illinois Press, 1989, p.686.), ここでは従わない。

2) S. B. Kaufman and P. J. Albert, *The Samuel Gompers Papers*, Vol.3, p.686; C. J. Cyphers, *The National Civic Federation and the Making of a New Liberalism*, p.20.

3) Allen F. Davis, *Spearheads for Reform: the Social Settlements and the Progressive Movement, 1890-1914*, Oxford University Press, 1967, p.110.

Coal Trusts Company) へのキャンペーンで名を馳せ、彼自身の言葉を借りれば、「悪弊を正すための当然の性行」として「プロの改革者 (professional reformer)」への道を歩み始めることになる⁴⁾。ちなみに、1892年当時の同紙の発行部数は3万6,000部であった⁵⁾。

政治・経済部の責任者は、従業員福祉プログラムの創設・運営を兼務していた。この肩書きは、イーズリーに市政改革の指導者や、実業界・政界・労働界のリーダーの多くとの出会いをもたらした。また、ジャーナリストで社会改良家のウィリアム・T・ステッド (William T. Stead) やジェーン・アダムス (Jane Addams) のような慈善家との貴重な関係ももたらした⁶⁾。後でみるように、CCFの構成をどうするかに関しては、イーズリーはステッドと若干見解を異にしていた。さらに、イーズリーが未来の妻でNCFの福利厚生部 (Welfare Department) の事務担当者 (secretary) を務めたガートルード・ブレッケンリッジ・ビークス (Gertrude Breckenridge Beeks) と出会ったのもシカゴであった。当時、彼女はCCFの常勤職員をしていたが、1901年にサイラス・H・マコーミック・ジュニア (Cyrus H. McCormick, Jr.) に請われ、シカゴにあったマコーミック収穫機会社 (McCormick Harvesting Machine Company) のマコーミック工場 (McCormick Works) で福利制度担当者 (welfare secretary) として雇われた⁷⁾。

教育と公益事業への関心は別として、イーズリーは共和党の全国レベルの活動に積極的にかかわっていた。彼は、カンザス州で共和党の地域後援者としての地位を確固たるものにしていった。シカゴに居を移した後も共和党を支援し続け、1896年にはウィリアム・マッキンリー (William McKinley) の選挙運動を積極的に支援していた⁸⁾。

イーズリーは、CCFでも、そしてCCFを離れて結成したNCFでも、会長職に就くことはなかった。しかし、CCF・NCFの45年の歴史を通して執行委員会 (executive council) の議長を務め、節目節目には事務局長 (secretary) を兼務していた。クリストファー・J・シファース (Christopher J. Cyphers) は、「CCFが成功し、最終的に全国レベルにまでその活動を拡大したことの多くは、イーズリーの信念と政治家、労働界のリーダー、社会学者、そして社会改良家といった印象に残る一団を組織に引き込む彼の能力に負っていた」⁹⁾とイーズリーを評価しているが、この点に関しては筆者も同感である。

4) G. M. Jensen, *The National Civic Federation*, p.24.

5) B. L. Pierce, *A History of Chicago*, Vol. III, A. A. Knopf, 1957, p.408.

6) C. J. Cyphers, *The National Civic Federation and the Making of a New Liberalism*, pp.20-21.

7) 詳しくは、以下の文献を参照のこと。Robert Ozanne, *A Century of Labor-Management Relations at McCormick and International Harvester*, University of Wisconsin Press, 1967. (伊藤健市訳『アメリカ労使関係の一系譜—マコーミック社とインターナショナル・ハーヴェスター社—』関西大学出版部, 2002年。) 伊藤健市『インターナショナル・ハーヴェスター社従業員代表制の研究』関西大学出版部, 2008年。

8) C. J. Cyphers, *The National Civic Federation and the Making of a New Liberalism*, p.21.

9) *Ibid.*, p.20.

3 市民運動の展開とシカゴ市民連盟

中西部の中核都市シカゴは、世界史でも比類のないスピードで成長を遂げた都市であった。1840年に5,000人たらずであった人口は、1871年のシカゴ大火を含む10年間を除いて、10年ごとにほぼ倍増し、1890年には百万人を突破した。こうしたシカゴの成長は、「1890年までにシカゴは組織の町となり、そこでは個人の努力は無に等しかった。そこは独占の町であり、普通の人間に対し、それまでの貴重な機会を閉ざした」¹⁰⁾のである。シカゴの都市住民—とくに都市中産階級—が自分たちの権利を守るためには、何らかの「組織」が必要であった。

1871年に結成されたシカゴ市民協会 (Citizen's Association of Chicago) は、市民が主体となって結成したアメリカで最も古い団体であった。市民主体と銘打ってはいるものの、この団体のある委員会には次のような当時の名だたるシカゴの実業家が顔を揃えていた。それは、サイラス・H・マコーミック (Cyrus H. McCormick), P・D・アーマー (P. D. Armour), M・ネルソン (M. Nelson), M・フィールド (M. Field), ジョージ・M・プルマン (George M. Pullman), A・F・シーバーガー (A. F. Seeberger), W・J・クワン (W. J. Quan), H・M・キング (H. M. King), E・G・メイソン (E. G. Mason) らであり¹¹⁾, その会長は後にタフト政権において財務長官を勤めたフランクリン・マクヴァーグ (Franklin MacVeagh) であった¹²⁾。マクヴァーグはCCFと関係し、後にNCFでも重要な役割を演じた。シカゴ市民協会はアメリカ最古の市政改革組織 (civic reform organization) でもあり¹³⁾, その活動は市政に巣くう高利貸しや競馬場の悪弊, そして個人歳出割当の是正へと向かったが、とりわけ重要な活動として州法改正による行政サービス (civil service) 立法化の推進をめざしていた¹⁴⁾。

このシカゴ市民協会を嚆矢として、1893年には都市政治の改革を目的とした無党派の団体、シカゴ市民センタークラブ (Chicago Civic Centre Club) が結成された。このように、CCFが結成されるまでに、多くの市民が主体となった団体が組織されており、そうした経験のうえにCCFが登場したのである。

このような団体を通して、シカゴは徐々に改善されつつあり、「シカゴの改革者 (reformers) は、他の都市が従うべき諸事例を提供」¹⁵⁾していたのである。ジェーン・アダムスによると、「1889年から1890年にかけての冬には、指導的な市民の忠告と積極的な参加によって、無政府状態の

10) Ray Ginger, *Altgeld's America*, Funk & Wagnalls, 1958, p.6.

11) B. L. Pierce, *A History of Chicago*, Vol.Ⅲ, p.281.

12) Graham Taylor, *Pioneering on Social Frontiers*, University of Chicago Press, Reprinted by Arno Press, 1976, p.14.

13) *Ibid.*, p.15.

14) *Ibid.*, p.16.

15) *Ibid.*, p.12.

混乱を救える唯一のものは、政府に反対する者が不満をもらす害悪について自由に話させ、自由に討論させることであるという結論に達していたのである。当時、まだ新しかった公会堂で、毎日曜日の夕方になると、公開の大討論会が行なわれ、ライマン・ジャッドスン・ゲージ(Lyman Judson Gage, 後にみるように彼はCCFの初代会長であった一注、伊藤)のような代表的市民の司会で、あらゆるかくれた論議も公然と行われることになった」と述べ、「これらの集会がもし早くに開催されていたならば、ヘイマーケットの騒乱とそれに伴う種々の問題は避けられたであろう、というように私たち市民の考え方が変わってきた」といわれるような状況にあった¹⁶⁾。しかし、このような試みはある一点においてあまり効果はなかった。なぜなら、「賃労働者と経営者との間の相互の敵対は増大し続けていた」からであり、「代々続く労働者階級が形成されつつあり、人間はその努力によってその地位を向上させるべきである、という理想がまがいものとなっていた」からである¹⁷⁾。

このようなシカゴにおける市民運動とそうした運動が労使の階級対立によって危機に頻していた時期にCCFは創設されたのである。その意味で、CCFはそれまでの市民主体の組織であるという点は継承しながらも、当時の労使関係の展開をその視野に入れて活動しなければならないという、既存の諸団体とは若干異なる背景のもとに登場した。

4 イーズリーとシカゴ市民連盟

CCFは、1893年にシカゴで開催された万国博覧会が示す楽天主義と、現実のスラム状態・疾病の蔓延・腐敗した政治との乖離に触発され、何よりも1893年恐慌を契機に組織された。1893年恐慌は、「成長途上にあったアメリカ産業経済の脆さ、工業化が生み出す社会的要請を満たす既存の政治的・経済的な制度と政策の不適切さ」¹⁸⁾を浮き彫りにした。恐慌とそれに続く不況は、近代産業資本主義にとって最初でかつ真の意味での危機をもたらしたのである。リチャード・シュナイロフ(Richard Schneirov)は、特にシカゴが不況の矢面に立つ位置にあったとして、「近代化する社会をはっきりと示す都市はシカゴ以外にはない。シカゴでは、市場関係に巻き込まれる人口の爆発的な増加、輸送と製造における新技術の集中化・同質化の影響、経済の主要部門におけるビジネスの垂直的・水平的な統合、都市空間の分化と専門化の進展、そして地方政府による新規かつ拡大する責任の受諾、といったことを感じ取ることができ

16) Jane Addams, *Twenty Years at Hull-House*, Macmillan, 1951, pp.177-178. 柴田善守訳『ハル・ハウスの20年—アメリカにおけるスラム活動の記録—』岩崎学術出版社、1969年、131～132ページ。ただし、訳文通りではない。なお、ゲージが公開の討論会を開催していたことについては以下の文献を参照のこと。R. Ginger, *Altgeld's America*, p.60.

17) R. Ginger, *Altgeld's America*, p.248.

18) C. J. Cyphers, *The National Civic Federation and the Making of a New Liberalism*, p.19.

た」¹⁹⁾と述べている。

（1）1890年代初頭のシカゴ

CCF創設前後のシカゴの状況を、レイ・S・ベイカー（Ray S. Baker）は次のように記述している。1894年の初めには100軒以上の賭博場があった。警察はその存在を把握していたが、市長が深く関与していたため、手を出せなかった。また、シカゴ市内とその周辺部には馬券売り場のある4つの競馬場とその付随施設が営業し、何千人もの人々が競馬に興じていた。市当局は、完全に獵官制（spoils system、政権を獲得した政党が情実によって官職を決定する慣行のこと―注、伊藤）に委ねられていた。市の給与台帳には誰もが知っている泥棒・ギャンプラー・酒場の主人だけでなく、多くの区の政治家や政治屋の子分（heelers）が載っていた。多くの汚職者が警官のなかにいた。市議会は特権の販売で忙しかった。多額の予算が街路の清掃に支出されていたにもかかわらず、多くの街路は不潔で、とくに市の中心部以外はそうであった。婦人がサービスするマッサージパーラーが無制限に営業していた。衛生部の調査が手ぬるいため、多くのパン屋やミルク倉庫が汚い倉庫の地下で営業を許可されていた。1894年11月の選挙において、多くの選挙区で騒動が生じ、一人が殺され100人以上が怪我をしていた。シカゴの慈善団体のなかにも腐敗が蔓延していた。いくつかの団体は、その活動において互いに重複し合っており、救済を必要とする人々がまったく援助されないとか、またある者は必要以上に受け取るといった事態が発生していたのである²⁰⁾。

こうした状況の悪化に拍車を掛けたのが、19世紀最後で最悪の1893年恐慌とその後の不況であった。この恐慌下、アメリカ全土で642の銀行と約1万6,000の企業が倒産し、1,500万人の労働人口のうち300万人が失業していたといわれている。シカゴでは、1893年9月に大工組合がその組合員の約80%に仕事がないと報告していた。また、9月末に実施された警察の調査によると、シカゴの工場労働者の半分以上がレイオフされていた。例えば、イリノイ製鋼会社（Illinois Steel Company）では最大雇用人員（full capacity）が3,600人であったにもかかわらず225人しか雇用されておらず、以下プルマン豪華車輛会社（Pullman Palace Car Company）では4,348人のところ1,670人、ディアリング収穫機会社（Deering Harvester Company）では3,000人のところ600人、マコーミック収穫機会社では2,000人のところ440人しか雇用されていないといった状況であった。また、鉄道貨物操作場ではその従業員の20%を、食肉包装会社では25%の従業員をそれぞれレイオフしていた。いくつかの小工場は完全に閉鎖されていた²¹⁾。シカゴ全体で約20万人の失業者がいたといわれている。

19) Richard Schneirov, *Labor and Urban Politics: Class Conflict and the Origins of Modern Liberalism in Chicago, 1864-97*, University of Illinois Press, 1998, p.329.

20) Ray S. Baker, "The Civic Federation of Chicago," *The Outlook*, July 27, 1895, p.132.

21) *Chicago Times*, September 30, 1893 (Richard Jensen, *The Winning of the Midwest*, University of Chicago Press, 1971, p.212.).

1893年5月1日に始まったコロンブスのアメリカ大陸発見400周年を記念した万国博覧会（World's Columbian Exposition）が10月31日に終わった時、大量の失業者が町中に溢れていたのである。それは、社会主義者や無政府主義者がデモを組織したり、8月に散発的に発生していた暴動を大規模化させる可能性を孕んでいた。

（2）シカゴ市民連盟の創設

以上の1983年恐慌下の失業問題、シカゴ政治の腐敗、行政サービスの欠如、都市改革問題への関心を反映して、シカゴの労働組合は1893年11月12日（日曜日）に中央音楽堂（Central Music Hall）で大衆集会を開催し、この集会の数週間後にCCFが結成された²²⁾。

この大衆集会は、「他のどんなグループよりも暖かな支援を与えてくれた労働組合の返答に元気づけられて」、開催されたものであった²³⁾。会場には、ロンドンの『レビュー・アンド・レビューズ（*Review and Reviews*）』誌の編集者で、著名なジャーナリストであったウィリアム・T・ステッドが招聘されていた。彼は、信仰心厚い社会改良家でもあった。さらに、ステージの上にはシカゴを代表する経営者と労働組合のリーダー、市の行政担当者とそこから排除された人々、牧師と酒場の主人、賭博常習者と神学教授、名高い名家の婦人と悪評高い「マダム」、裁判所の判事とジョン・P・オールドゲルド知事（John P. Altgeld）によって最近州刑務所から釈放されたヘイマーケット暴動での既決囚といったように、考えをまったく異にする人々がそれぞれ席を同じくしていた²⁴⁾。この種の集会は、それまでシカゴでは開催されたことはなかった。「市民連盟（Civic Federation）」という名称は、この時ステッドが使った「市民教会（Civic Church）」をもじったものであった²⁵⁾。

この集会では、ステッドに続いて老巧な社会主義者であったトマス・モルガン（Thomas Morgan）が登場し、組織化された労働者はこれまで諸悪に抗議してきたことを主張し、「沈黙の罪—このシカゴの歴史において初めてここで打ち破られた沈黙」を非難するよう宣言していた²⁶⁾。彼は演説のなかで、「この自由な国におけるこのような社会状況のもとで、無政府主義者や爆弾やダイナマイトがないと信じるのか。やけっぱちになった人間が、不安を抱え反乱を起こすとは思えないのか²⁷⁾」と訴えていた。

ステッドはこの集会で、種々の勢力を巨大な全体に纏めようと模索していた。だが彼は、シカゴが強大化する問題に効果的に対処できなかった原因を、そこで暮らすエリートたちがその

22) R. Ginger, *Altgeld's America*, p.249.

23) G. Taylor, *Pioneering on Social Frontiers*, p.29. この点に関し、ジョセフ・O・バイレン（Joseph O. Baylen）はステッドが自費をもって大衆集会を準備したとしている（Joseph O. Baylen, "A Victorian's 'Crusade' in Chicago, 1893-1894," *The Journal of American History*, Vol.51, No.3 (Dec., 1964), p.423.）。

24) G. Taylor, *Pioneering on Social Frontiers*, p.29.

25) R. S. Baker, "The Civic Federation of Chicago," p.133.

26) 27) G. Taylor, *Pioneering on Social Frontiers*, p.31.

富と権力を恐慌の悪影響を和らげるのに使いたがらなかった点にある、とみていた²⁸⁾。一方、イーズリーは、1893年の混乱のなかに、ステッドのいうエリートも含めて多党派的にシカゴで起きつつある大変革に善処する方法を討論する会合を開催し、そこに関係者を一堂に会する機会を見出していた²⁹⁾。

この大衆集会では、イーズリーの考えに沿いつつ、「ある種の市民連合 (civic confederation) の形成が実行可能で实际的」³⁰⁾であることから、まず5名で構成される委員会が結成された。この5名は、「組織委員会 (organizing committee)」の構成員を選考するために指名されており、教育界を代表するシカゴ大学教授エドワード・N・ベミス (Edward N. Bemis)、商業界を代表する材木商のT・W・ハーヴェイ (T. W. Harvey)、労働界を代表するL・T・オブライエン (L. T. O'Brien)、宗教界を代表する人民教会派 (People's Church) のH・W・トマス (H. W. Thomas)、婦人を代表するハル・ハウスのジェーン・アダムスらがその面々であった³¹⁾。この5名が、40人で構成される「組織委員会」を選出した。それは、当初21人で構成される予定であったのが変更されたものである³²⁾。この40人には、銀行家、商人、製造業者、労働組合主義者、労働者のより急進的な指導者、弁護士、聖職者、教師、社会事業家が含まれ、男女の著名人や一般市民も含まれていた。また、この40人は、支持政党や宗派に関係なく選ばれていたことから、そこには、カトリックもプロテスタントもユダヤ教の信者も一堂に会していた³³⁾。これは、新移民の大量流入によるシカゴの人種的・宗教的多様性を考慮した人選であった。

(3) 組織委員会とシカゴ市民連盟の目的

40人で構成される組織委員会は、シカゴのための活動を求める広範かつ緊急の要請に対し、次のように宣言していた。すなわち、「この組織の目的は、われわれの自治的、慈善的、倫理的な関心を前進させ、そして、シカゴにおける一般大衆の良心を激励し、覚醒させることが可能となるあらゆることを達成しようと努力しているすべての勢力を、潜在的にそういった能力をもち、非政治的で、無党派的な1つのセンターに集中させることにある。このことを1日で達成することは期待できないが、すべての偉大な運動は始まりをもたねばならない。そして、シカゴをこの国のなかで最もうまく統治され、最も健全で、最も清潔な都市であると思い描きながら、全階級を網羅する指導的市民と相談することで、人々が大博覧会とその付随物と

28) C. J. Cyphers, *The National Civic Federation and the Making of a New Liberalism*, p.19.

29) *Ibid.*, p.20.

30) G. Taylor, *Pioneering on Social Frontiers*, p.33.

31) Douglas Sutherland, *Fifty Years on the Civic Front*, The Civic Federation, 1943, p.7; J. O. Baylen, "A Victorian's 'Crusade' in Chicago, 1893-1894," p.425.

32) D. Sutherland, *Fifty Years on the Civic Front*, p.7; A. F. Davis, *Spearheads for Reform*, p.188.

33) G. Taylor, *Pioneering on Social Frontiers*, pp.33-34.

しての世界会議（World's Congress）から得た新たな考え、新たな野心とインスピレーションに今もなお満たされている現時点こそが、そのような運動を始めるべきチャンスであると信ずる（傍点、伊藤）」³⁴⁾、と。

いうまでもなくこの組織委員会の目的は、同委員会が創設に関係したCCFにもつながるものである。CCFの指導層はこの組織委員会によって選出され、彼らを中心にCCFが誕生した。CCFは、「失業者を援助するという差し迫った要求に応えることに加えて、経済面だけでなく社会的・政治的な側面にまで及ぶ市政改革（civic reform）を促進しようと計画されたもの」³⁵⁾であった。イーズリーの言葉を借りれば、CCFは、「人々と諸団体との間に、共感と出会いを媒介する役割を演じる。ここでいう人々とは、異なった使命と目標を追い求め、国籍・信条・環境を異にし、[そして]互いに面識のない人々である。」³⁶⁾シカゴの都市改革コミュニティとしてのこの新しい連携組織は、「シカゴ社会の刷新という課題に対し、市民の協力と社会的効率性（social efficiency）という新しい理念に焦点を合わせる」³⁷⁾ことを主たる目標としていた。一般的な言い方をすれば、CCFは、イーズリーがいうように、近代社会が不況の際に不可避免的に強制された問題に関心をもつ個人とグループを幅広く結集した組織であった³⁸⁾。

CCFの目的は、以下の3点にあった³⁹⁾。つまり、

- 1 シカゴの自治的・慈善的・産業的・道徳的な利害の推進に向けた取り組みを行っているすべての勢力を含めた、影響力が大きく、政治的に中立で、無党派の団体を組織すること、シカゴの地方政治が、正直で、効率的で、儉約的であること、そしてシカゴ市民の最高の福祉を促進する際にそうした勢力を利用・援助すること。
- 2 シカゴの様々な場所に居住する人々、様々な職業に従事する人々、様々な国籍をもつ人々、様々な主義や何ら主義をもたない人々、以上のような理由から互いに面識はないが、それにもかかわらず、シカゴの安寧に同じような関心をもつ人々、そして、どのような種類の自治体福祉を促進するかに関する要求で意見が一致している人々、これらの人々の間の出会いと共感の媒体として役立つこと。
- 3 地方自治体の業務における悪習を発見・是正しようとしている諸団体の数を増やし、その効率性を向上させること、地方自治の問題を州や国の政治の問題から最大可能な限り分離することによって、地方自治体業務への市民の関心を高めること。

CCFの主たる関心は、以上の3つの目的にはっきりと示されているように、市政問題一と

34) *Ibid.*, p.33. ここに示された目的と活動の範囲は、1893年11月23日の会合の議事録から抜粋されたものである（R. S. Baker, "The Civic Federation of Chicago," p.133.）。

35) Gerald Kurland, *Seth Low : the Reformer in an Urban and Industrial Age*, Twayne Publishers, 1971, pp.221-222.

36) 37) R. Schneirov, *Labor and Urban Politics*, p.334.

38) C. J. Cyphers, *The National Civic Federation and the Making of a New Liberalism*, p.20.

39) D. Sutherland, *Fifty Years on the Civic Front*, p.9.

くに市政改革—にあり、学校改革、市政における道德観の向上、租税システムの再編、シカゴにおける犯罪の全廃、といったことに力点を置き、それらはある程度改善されていた⁴⁰⁾。だが、イーズリーの立場からは、CCFの機能はそれだけでは不十分であった。この点が、イーズリーがCCFから離れ、新たにNCFを組織しなければならないと考えた遠因となる。

当時、アメリカ社会が直面していた大きな問題は2つあった。1つは独占大企業(トラスト)規制の問題であり、もう1つは労使関係改善の問題であった。こうした問題の解決には、CCFのような中産階級的な関心を全面に押し出す団体が必要とされた。なぜなら、こうした団体のほうが、全国民的な見地から合理的な解決策を提示しうる可能性がかえって高かったからである。イーズリーは、このような見地からCCFの再編を試みたが、先に指摘したCCFの目的と、何よりもシカゴという限定された地域性により、彼の意図は十分に達成できなかった。当時のアメリカ社会が直面していた問題は、基本的には国家的な問題であり、その解決には全国民的な立場からの取り組みが必要とされていたのである。さらに、そこにはアメリカ社会の動向に十分影響を与えよう人々が結集していなければならなかった。その意味で、その後のNCFに示される実業家・一般大衆・労働界のリーダーという三種類の人々が積極的に関与するものでなければならなかったのである。とくに実業家は、産業界の指導者であり、アメリカ社会が直面していた問題は彼らの態度や行動によって形成されるものと考えられていたがゆえに、彼らを中心とした組織が何よりも必要とされたのである。

この点で、イーズリーの傑出した才能が活かされることとなる。彼は、すでに複数の人物名を挙げて指摘したように、当時の著名人と個人的に関係をもつ特別の才能を有していた。

(4) イーズリーの人脈

まず、CCFの創設時の役員を見ておこう。CCFは、1894年2月3日に法人組織となった後、同月15日に最初の会議を開催し、そこで最初の役員が決定された。会長はライマン・J・ゲージ (Lyman J. Gage, 1894~95年)、第一副会長はポッター・パルマー夫人 (Mrs. Potter Palmer)、第二副会長はJ・J・マクグラス (J. J. McGrath)、財務担当者にE・S・ドリュエー (E. S. Dreyer)、事務局長がラルフ・M・イーズリー、その他の理事として大工組合のJ・J・ラインハン (J. J. Linehan)、印刷工組合のM・J・キャロル (M. J. Carroll)、T・W・ハーベイ (T. W. Harvey)、L・C・コリンズ (L. C. Collins)、ジェーン・アダムス、アダ・スウィート (Ada Sweet)、S・H・スチーヴンスン (S. H. Stevenson)、フランクリン・マクヴァーグ、G・E・アダムス (G. E. Adams)、E・B・バトラー (E. B. Butler) らがいた⁴¹⁾。

初代会長のゲージは、1891年にシカゴ・ファースト・ナショナル銀行 (First National Bank of Chicago) の頭取に就任し、アメリカ銀行家協会 (American Bankers' Association) の会長

40) *Ibid.*, pp.8-9 and pp.13-15.

41) D. Sutherland, *Fifty Years on the Civic Front*, p.8.

でもあった⁴²⁾。彼は、「経済面での指導において傑出した素質を典型的に示していただけでなく、鋭敏な社会的・市民的良心をもっていた」⁴³⁾といわれるようにシカゴの中産階級から絶大なる支持を得ていた。さらに、ヘイマーケット事件の被告の恩赦運動で積極的な役割を演じていた⁴⁴⁾。この点で、シカゴの労働騎士団（Knights of Labor）の機関誌ですら「心の広い（a broad-gauged）」人物で、「大問題（労働問題のこと、注—伊藤）の解決において」指導力を発揮する人物と評価していた⁴⁵⁾。このようにゲージは、労働組合も含めてシカゴの市民から幅広い支持を受けていたのである。また、万国博覧会の理事長としてそれを組織していた。彼は、何よりもCCFによって緩やかな改革を実現し、改善された労使関係を通して階級闘争の調停を図ろうとしていたのである⁴⁶⁾。また、CCFに加入し、その後NCFとも深くかかわったフランク・マグヴァーグもゲージと同じ見解をもっていた⁴⁷⁾。彼らは、アメリカがかつて経験したことの深い深刻な恐慌とその後の不況のなかで、その背後にある潜在的な危機を察知し、ヘイマーケットの騒乱やホームステッド・ストライキの再来を避けるためには、何か積極的な運動が必要なことを認識していた。ゲージは、後に共和党ウィリアム・マッキンリー政権とセオドア・ローズヴェルト（Theodore Roosevelt）政権の財務長官に就任していた⁴⁸⁾。

第一副会長ポッター・パルマー夫人は、シカゴの上流階級を代表する著名人であっただけでなく、シカゴにおける社会事業の推進に対し援助を依頼された時に、「もし私が産業状態と労使関係（industrial conditions and relations）の改善を援助できるなら、私は私のできることの遂行に最大の関心を抱く」⁴⁹⁾と述べていたように、労使関係も含めた幅広い問題に関心を示していた。また、その後NCFとも関係—とくに福利厚生部（Welfare Department）と婦人部（Women's Department）に一をもっていた。第二副会長J・J・マクグラスは、レンガ積工の組合の前委員長でシカゴ労働組合連合会（Chicago Trades and Labor Assembly）とも深くかかわっていた⁵⁰⁾。

CCFの結成にはユニオン・リーグ・クラブ（Union League Club）のメンバーもかかわっていた。このクラブは1879年に組織され、「外観は社交的で親睦会的な組織であったが、共和党

42) S. B. Kaufman and P. J. Albert, *The Samuel Gompers Papers*, Vol.3, p.691.

43) B. L. Pierce, *A History of Chicago*, Vol.Ⅲ, p.205.

44) S. B. Kaufman and P. J. Albert, *The Samuel Gompers Papers*, Vol.3, p.691.

45) B. L. Pierce, *A History of Chicago*, Vol.Ⅲ, p.205.

46) 47) R. Ginger, *Altgeld's America*, p.280; Kenneth L. Kusmer, "The Functions of Organized Charity in the Progressive Era: Chicago as a Case Study," *The Journal of American History*, Vol.60, No.3 (Dec., 1973), p.675.

48) Marguerite Green, *The National Civic Federation and the American Labor Movement, 1900-1920*, Catholic University of America Press, 1956, p.5; S. B. Kaufman and P. J. Albert, *The Samuel Gompers Papers*, Vol.3, p.691.

49) G. Taylor, *Pioneering on Social Frontiers*, p.25.

50) R. Schneirov, *Labor and Urban Politics*, p.351.

の政策を永続化させることに専念していた⁵¹⁾と評価されるように、共和党を支持する人々で構成されていた。

以上の人々を含めて、CCFとのかかわりのなかでイーズリーが面識を得た人々として、ゴードン・M・ジェンセン (Gordon M. Jensen) は以下のような人々を列挙している⁵²⁾。ウィリアム・マッキンリー、セオドア・ローズヴェルト、ウィリアム・タフト (William H. Taft) といった大統領経験者。マッキンリー政権下のライマン・J・ゲージとコーネリアス・N・ブリス (Cornelius N. Bliss)、ローズヴェルト政権下のジョージ・B・コートリュー (George B. Cortelyou) とオスカー・ストラウス (Oscar Straus)、タフト政権下のフランクリン・マクヴァーグといった各省の長官。マイロン・T・ヘリック (Myron T. Herrick)、エリユー・ルート (Elihu Root)、セス・ロウ (Seth Low, 彼は後にNCFの会長となった) といった政治家。シカゴのチャールズ・ヘンロティン夫人 (Mrs. Charles Henrotin) とポッター・パルマー夫人、ニューヨークのJ・ボーデン・ハリマン夫人 (Mrs. J. Borden Harriman) とアナ・モルガン (Anna Morgan) といった社会運動の指導者。その他、アルトン・B・パーカー (Alton B. Parker)、フランシス・L・ステットスン (Francis Lynde Stetson)、ニコラス・M・バトラー (Nicholas Murry Butler)、チャールス・W・エリオット (Charles W. Eliot)、その説教がオープン・ショップ協会を通して配布されていたジョン・アイアランド大司教 (Archbishop John Ireland)、ジョン・P・モルガン (John P. Morgan) お抱えの説教者として有名なヘンリー・C・ポッター司教 (Bishop Henry C. Potter) といった専門人 (profession)。サミュエル・ゴンパーズ (Samuel Gompers)、ジョン・ミッチェル (John Mitchell)、国際機関士友愛組合 (International Brotherhood of Engineers) 委員長のワーレン・S・ストーン (Warren S. Stone)、国際沖仲仕組合 (International Longshoremen, Marine and Transportworkers' Association) 委員長のダニエル・J・キーフィ (Daniel J. Keefe) といった20世紀初頭の主要な労働組合運動指導者。マーク・A・ハナ (Mark A. Hanna, 彼は後に2代目のNCFの会長となった)、アンドリュー・カーネギー (Andrew Carnegie)、オーガスト・ベルモント (August Belmont)、セオドア・N・ヴェイル (Theodore N. Vail)、イサク・N・セリグマン (Issac N. Seligman)、フランク・A・ヴァンダーリップ (Frank A. Vanderlip)、ジョージ・W・パーキンス (George W. Perkins)、エルバート・H・ゲアリー (Elbert H. Gary) といった実業家であった。ここに挙がっている人々の大部分が、後にNCFと関係をもったことはいうまでもない。なお、最後の実業家に関しては、ここに列挙した人々はそのなかのほんの一部であるとジェンセンは指摘している。

さらに、忘れてはならないのが、学識経験者—特に社会学者—との関係である。1880年代と1890年代を通じて、経済学者、社会学者、政治学者は、アメリカで増大する社会問題を理解・

51) B. L. Pierce, *A History of Chicago*, Vol. III, p.484.

52) G. M. Jensen, *The National Civic Federation*, pp.27-28.

検討する際の鍵として、次第に「事実」と自然科学の研究手法に着目するようになった。例えば、経済学の専門家は、社会の変化と経済プロセスとの間に明確な接点を見出し始めた。同じく、社会学者は、社会の発展を一連の「客観的な」状況、その多くは経済に本質があった状況に関連づけたのである⁵³⁾。さらに、社会科学の客観性に大きく依存することで、CCFの活動は政策決定プロセスにおける実証主義者の性格をますます色濃くしていった。専門的な教育と研究を通して、習得される一群の「社会的な知識」を有する専門家の意見に従うと公言する必要性は、ワシントンの政治家が全国的・国際的に重要な問題に比較的「無知」であったことを反映していた⁵⁴⁾。イーズリーは、「教育を受けていない (uneducated)」上院・下院議員のしたようにさせれば、国民福祉に有害な法律を通過させ、国民福祉に有害な公共政策を進めかねないことを恐れた。それでCCFは、統計に裏づけられ、専門家によって定式化された経済理論を可能な限り広範に前進・普及する教育の重要性をことさら強調していたのである⁵⁵⁾。こうした考えのもと、イーズリーが交流したのが、ジョン・R・コモنز (John R. Commons)、ジェレミア・ジェンクス (Jeremiah Jenks)、ジェンクスのかつての教え子エドワード・ダナ・デュランド (Edward Dana Durand)、エドウィン・R・A・セリグマン (Edwin R. A. Seligman) といった当時の代表的な政治経済学者であった。

これら当時の実業家・学者とイーズリーとの関係は、彼が企画し、CCFの後援のもとに開催された4度にわたる全国会議において形成されたものであった。

(5) シカゴ市民連盟の限界

最後に、以上の人々がどういった意図をもってCCFの活動を積極的に支援していたのかを明らかにし、それがCCFに限界を課す遠因となった点を指摘しておこう。

CCFの構成員にはシカゴの最も裕福な階層に属する人々やシカゴの著名人が多数含まれていた。彼らの多くは、「けっして社会意識を表明しなかったし、市政改革を期待する運動に参加」⁵⁶⁾したこともない中産階級に属する人々であった⁵⁷⁾。では、なぜこういった人々がCCFには積極的に参加したのであろうか。

それにはいくつかの理由が考えられる。まず第1に、都市中間層としての彼ら中産階級に顕著な慈善的・博愛的・宗教的な観点からの行動であった。それは、「高い身分に伴う道義上の義務 (noblesse oblige)」の表明であった。さらに、先のステッド自身がアダムスに「善意が錯綜していて、その中枢部に確固たる方針がないために、多くの善意が通じないで相殺し合っている」⁵⁸⁾と語っているように、それはシカゴ市民の「善意」を組織化しようとする団体であ

53) 54) 55) C. J. Cyphers, *The National Civic Federation and the Making of a New Liberalism*, p.24.

56) G. Kurland, *Seth Low*, p.223.

57) そこには1890年代までに発展した婦人運動に触発された婦人も含まれていた。それにはシカゴ女性クラブ (Chicago Woman's Club) が影響を与えていた。

58) J. Addams, *Twenty Years at Hull-House*, p.160. 前掲邦訳書, 119ページ。

った。また、先に引用したように、道徳観豊かな勢力を纏めようとする団体としても認識されていたのである。しかし、当時のアメリカ資本主義が直面していた危機的状况を考慮に入れるなら、こういった慈善的な動機はCCFの本質でないことは明らかである。また、CCFが1893年恐慌を契機に組織されたという事実を踏まえるなら、別の観点からする動機がそこに存在することは容易に理解できる。

CCFは、社会の底辺にいる人々に対し、彼らの置かれている状態を改善する積極策が講じられないなら、それまでアメリカの発展を支えてきた社会体制に変革が起こりうる可能性が支配階級に意識され、それへの対応として組織されたものであった。しかも、そこには都市中間層として一定の地位を確保しつつあった中産階級が、こういった社会変革に最も敏感に反応することを利用しながら、彼らを全面に押し出すことで、当時の問題—とくに労働問題—に対処しようという意図があったのである。それまで市民運動に参加したこともなかった人々が、表面上の「善意」の組織化にひかれて多数参加していたという事実はこの点を如実に物語っている。第1表が示すように、シカゴにおける慈善団体の1886年から1908年にかけてのリーダーの職業的基盤は、「銀行家」は多いものの、当時のアメリカ経済の発展を支えていた「製造業者」あるいは「管理者もしくは役員」は少数派であり、圧倒的に都市中間層に属する「商人」が占めていたのである（第1表に示される56人は、シカゴの慈善団体の著名な理事の89%を代表していた）。もちろん、彼らの行動が当時の危機的状况に対する彼らなりの回答であったことはいうまでもない。そしてこのことが、“civic”を強調する「市民連盟」として組織される最大の要因となっていた。

第1表 シカゴにおける慈善団体の理事56人の特徴 (1886～1908年)

職 業	人 数	1900年時点 での年齢	人 数	支持政党	人数
商 人	14	30歳未満	4	共和党	15
銀 行 家	10	30～39歳	5	民主党	6
弁 護 士	7	40～49歳	15	不明	35
製 造 業 者	4	50～59歳	16		
管理者もしくは役員	3	60～69歳	10		
教 育 者	3	不 明	6		
セルツメント労働者	3				
聖 職 者	2				
医 師	2				
不 動 産 業 者	2				
そ の 他	6				

出所) Kenneth L. Kusmer, “The Functions of Organized Charity in the Progressive Era: Chicago as a Case Study,” *The Journal of American History*, Vol.60, No.3 (Dec., 1973), p.673.

こうした都市中間層を主役とした慈善的・博愛的・宗教的な観点からの行動は、一定の役割を演じていたとはいえ、それはアメリカ社会の主役として確固たる地位を築こうとしていた巨

大ビジネス企業を中心とした支配層にとっては不十分なものとみなされた。この点で看過できないのは、いわゆるホレイショ・アルジャー（Horatio Alger）流の「ぼろから金持」といった立身出世物語が、20世紀への転換期には実現不可能なことが明らかになった点である⁵⁹⁾。その結果、巨大ビジネス企業のトップを含む実業界の支配層は、その優れた資質・特性（ホレイショ・アルジャー流に言えば自立心と勤勉）のゆえにその地位に就いたという伝統的な考えに代わって、舞台裏での陰謀の結果ではないかという考えが登場した。それは、地方経済を中核とする経済から、巨大ビジネス企業を中心に全国規模で経済を統合していかなばならなかった当時の支配層にとって、そのイメージの刷新が急務の課題であったことを意味した。だが、第1表が示す内容は、当時にあつては事実であつたかもしれないが、イーズリーや彼を支援する当時の巨大ビジネス企業を中心とした支配層が意図する、アメリカが直面する問題を全国規模あるいは全国的に議論するには、いささか物足りないものであつたことも事実であつた。イーズリーがCCFを離れ、こうした支配層を形成する人々とNCFを創設するのは、その意味からすれば必然だったのである。

5 今後の課題

CCFの限界は、本稿で明らかにしたイーズリーの人脈を通してCCFに積極的に関与した人々の思惑と、あくまでもシカゴの市政改革を中心に据えた活動を志向する人々との考えが一致しなかった点から派生したものであつた。そうした限界は、1894年に発生したブルマン豪華車輛会社とアメリカ鉄道組合（American Railway Union）との間の、同組合委員長ユーージン・V・デブス（Eugene V. Debs）にちなんだ、いわゆる「デブス鉄道ストライキ（Debs railroad strike）」以降徐々に表面化してくる。そして、基本的にはイーズリーが主導した4度の全国会議を通して明確化された。そこで、筆者の今後の課題は、この4度の全国会議を含むCCFの活動の展開のなかに、イーズリーがCCFを離れNCFの組織化を決意せざるを得なかった要因を見出すことにある。

（本稿は、以下の論文の一部を大幅に加筆、修正したものである。「全国市民連盟成立前史—シカゴ市民連盟の一考察—」（『大阪産業大学論集（社会科学編）』第79号、1990年）、「全国市民連盟の創設」（『大阪産業大学論集（社会科学編）』第81号、1991年）。）

59) John N. Ingham, "Rags to Riches Revisited: The Effect of City Size and Related Factors on the Recruitment of Business Leaders," *The Journal of American History*, Vol.63, No.3 (Dec., 1976). なお、1830年から1930年までのシカゴのビジネス・エリートについては次の文献が詳しい。J. M. Ghent and F. C. Jaher, "The Chicago Business Elite: 1830-1930. A Collective Biography," *Business History Review*, Vol.50, No.3 (Autumn, 1976).